



朝鮮通信使の来日(3)

『第三回・寛永元年(一六二四)通信使』

斎藤弘征

三代將軍徳川家光

江戸時代になって二〇年あまり、第三代將軍は家光が継ぎ、全国を統治する幕藩体制の形が固まってきました。家光の將軍襲職を受けて、対馬藩はすかさず玄方をはじめ、通信使来聘を要請する使者を釜山に送りました。対馬藩は通信使派遣を要請する一方、新しい朝鮮国王の即位を祝賀する使者も送り、朝鮮国との信を深めることも忘れてはいません。

寛永元年秋十一月(新暦)、朝鮮通信使は来日しました。表向きは新將軍の祝賀とまだ日本に残る被虜人の刷還でしたが、実は、他の目的もありました。通信使派遣要請のために釜山に赴いた対馬藩使者平智正はその理由として、「それをもって人心を鎮定せんがため」と伝えていきます。つまり徳川幕府は、朝鮮通信使の来聘をもって、將軍の権力や威光を諸藩や国民に誇示しようとしたのです。朝鮮国も、使節団を派遣しさらに日本を観察することによって情報を得、解決したい内憂外患を抱えていました。

対馬藩国書偽造は続く

通信使一行は十二月十九日(旧暦)、江戸城の

大広間で国書を將軍家光に奉呈しました。使行記「東槎録」(副使姜弘重著、「槎」とは筏の意)には家光の印象を、「頗る銳氣あつて年齢は二十一歳」と述べています。

二十二日になって將軍回答書が一行に届けられました。ところが、これを見た使臣たちは顔色をなくしました。日本とは対等外交を建前とする朝鮮としては、またしても受け取ることのできない書き方だったのです。

使臣たちはただちに玄方に改正を要求しました。当然、対馬藩は頭を抱え込むと思いきや、何のことはない、使臣たちが期待する通りに書き替えられた將軍回答書が、二十四日に調興から届けられ、信使一行は安心してその日に江戸を発ちました。こともなげにまたしても、懲りない対馬藩の偽造国書だったのです。

旅情温まる対馬

「東槎録」には、対馬の自然や人情、習慣など信使一行が新奇な目で見た光景が好意的に描かれています。対馬で初めて接する異国の光景は、信使たちの心を和ませたようです。

帰路、府中から船越浦に向かう途中、「花奔が山に満ち満ちており、景色も新鮮で旅路の心を慰めるのに十分であった」と記録しています。折しも旧暦二月下旬、この時季の花奔とは椿でしょうか、つつじでしょうか。鰐浦では旧暦の三月三日、「前の小島に登った。船の上の鮑作干たち

をして鮑を採らせたが、わが国の水夫と日本人たちが争って水に入って鮑を採ったが、まことに奇観であった」と、一年で最も干潮の大きいこの時季、海栗島辺りでにぎやかに交歓する両国の人々の情景を述べています。また、「夕方に砲の音がにわかに大きく聞こえ、山が崩れるようであった。暫くして勘左衛門(役職は不明)が猪一頭を猟して送ってきて、肩に担いで庭の中に入れて来たがまた一つの壯観であった」とあり、訥庵の「猪退治」(猪鹿追話)前の対馬には、まだ猪が多かったことを窺わせます。さらに、「寒食」といつて、「冬至から百五目目に当たる日で、各家庭では先祖の墓に詣で、お供え物をして祭祀を営む」風習も記録しています。現在のお彼岸のことでしょうか。

親切な琴の村人たち

一行の船は十月三日鰐浦の港を出て府中に向かいました。「東槎録」は、「唐浦(唐舟志か)を過ぎ一つの浦に入ったが、地名は金(琴)浦という。浦の中には人家が十余軒あって、林の中に小さな寺院が一つあって名称は善光寺という。上使以下と召使い数名が寺院を居所と定めたが、男女たちが道を挟んで見物して、あるいは合掌する者もあり、船上で使用する薪と水を真心こめて供給してくれた」と、記録しています。初めて接する異国の人々にも、こころ優しい村人たちです。

(さいとうひろゆき・対馬市文化財保護審議会委員)